

岩手生協の感謝の集いに参加し、津波被災地（宮古市田老町） を訪問して感じた事

松浦弘美

岩手県は面積が四国と同じくらいに広い上に、東日本大震災で被災した地域は、海沿いに限定された為、内陸部に住む県民の中でさえ、震災の記憶の風化が始まっているそうです。そんな中で、被災者に寄り添い、全国へ被災者と被災地の今を発信し続けている岩手生協、その活動を支える組合員さんたちに対して、私たちもいろんな形で協力していきたいと強く感じました。



大槌町で日本酒「浜娘」を醸造していた赤武酒造の古館社長の話の中で、「復興支援に買って下さい、復活することができました、と言え皆さん優しいから買ってくれるんです。けどね、義理で買っていただくのは続かないですよ。私らが納得いく美味しい酒をちゃんと作って、浜娘が美味しかったからまた売ってくれ、と言われないとダメなんです。」という言葉が心に残りました。

復活メーカーのこれまでの取り組みや商品に込められた思いを聞くにつれ、ユーコープでももっと商品を紹介して、お互いにウィンウィンの関係で、息の長い被災地支援ができたらなと思いました。

日本の万里の長城とまで言われた防潮堤で守られていた宮古市田老町は、津波で瓦礫と化し、今は更地の続くひっそりとした街に変わっていました。田老町漁協が海藻類の加工工場と倉庫を再建し操業を始めていますが、放射能汚染という根強い風評被害の為、売り上げが伸びていません。被災地の報道は、復活とか再開とかが多いけれど、復興には程遠い現実がここにはありました。

「今、被災地はどんなかを見に来てほしい。3.11辺りで急にワ〜と来るんじゃなくて、普通の時に時々でいいから来てほしい。忘れられているん



じゃないかと寂しい。」という被災者の話を聞き、また、七夕・クリスマス・お雛様、と送ったカードが、「一人じゃないと感じられた」と、とても喜ばれたという報告を受け、私たち一人一人ができることは何か？を考えなくてはいけないし、その思いをくみ取り、形にするのが組合員活動だと思いました。